

一、船舶移送をうけた奥羽出張病院患者の転帰 中西 淳朗
四月例会 平成十年四月二十五日(土)

一、醍醐寺宝蔵の眼科口伝書と医心方 榎 佐知子
一、江戸の考証医家 小曾戸 洋

例会抄録

横浜軍陣病院における

土佐・因州両藩の死者をめぐって

中西 淳朗

一、戊辰の江戸城開け渡し前後より、関東平野における旧幕軍騒乱までの間における薩摩藩の戦傷者対策を、史談会速記録・明治三十年十一月二十一日「より見出すことができた。これの証言者は旧大村藩々士・渡辺 清で、彼によると三月十四日、西郷隆盛の代理、木梨精一郎と共に英国公使パークスに、「明十五日は江戸城総攻撃につき、相当の戦傷者が出ると思されるので、病院を開設してほしい」と申し入れた。返事是否であり、それどころか、抵抗もしない徳川氏の城を攻めるのは非理であり、その上、横浜の居留外人の保護も考えぬ新政府は政府として認められぬ、という返答に驚き江戸城

総攻撃は中止となった。この時に英国人に病院を開設してもらう話は一旦消えた訳である。

二、この様に薩摩藩は戊辰戦争第二期に入る前から、戦傷者の治療は英国頼みであった。

江戸開城の前日(四月十日)、旧幕府の伝習歩兵隊、旗本らの大脱走により新たな戦争が房総、上毛で展開された。この戦の特徴は両軍ともにライフル銃を用いた銃撃戦のあと、白兵戦となったため、戦傷の質もかなり異なって貫通銃創の他に切創を伴う様なケースも出、一部の従軍藩医には加療できない状況が生れた。

薩摩藩では、宇都宮城内の戦傷者五名を仕方なく壬生城に移し、土佐藩々医・弘田玄又に治療を依頼している。また、房総方面の東征軍の損害は、戦死一五名、戦傷四三名(重傷二一名、軽傷二三名、程度不明九名・山形 紘氏による)となっており、重傷の三分之二一四名が薩摩藩であった。従って、戦傷の質と量にまず驚いたのが薩摩藩で、これが再び英医W・ウィリスに治療を頼みこむ引き金になったと思われる。

横浜軍陣病院の設立についての従来の記載は、前述の史実を全く欠いている。

三、横浜軍陣病院に入院して死亡した土佐・因州両藩の兵士を、諸文献、墓碑等からリストアップすると土佐は九名であるが、明らかな誤記(田垣利平)、墓はあっても病院日記等に記載なし(軍夫熊次)を除くと七名となる。この七名について、新政府関係係日誌で調べたところ、太政官日誌、江城日誌、

鎮將府日誌に戦傷記事を見出した。因州は七名全員が病院日記にきつちりのつており、江城日誌や鎮將府日誌にも記載されていた。しかし何故か太政官日誌には見出せなかつた。

入院戦傷者を診療した医師は、土佐は弘田玄又以下六名、因州は上島千里以下三名、薩摩は有馬意運以下四名である。

入院戦傷者の死亡率は土佐八・五%、因州三六・八%、薩摩は一四・三%であつた。

なお受傷日から入院日までの平均日数は、土佐三〇・七日、因州七・三日、薩摩七・八日、である。入院戦傷者死亡率と入院日までの平均日数とが反比例する理由は現段階では判然としない。

(平成十年二月例会)

大隈重信の切断手術から 健康生活へのセルフケアに関する研究

坪井良子

本研究は大隈重信の負傷から右大腿部の切断手術とその回復、さらに義足装着に至る過程と社会復帰、その後の健康維持に関するセルフケアの一連の状況ととりあげ、今日的観点から考察することを目的とする。

外務大臣大隈重信(一八三八一—一九二二)の負傷事件は、明治二二年一〇月一八日条約改正に反対する来島恒喜の投げた

爆弾によつておきた。

大隈の大腿部切断手術には主治医の池田謙斎、橋本綱常、高木兼寛、伊東方成、佐藤進、ドクトルベルツ、高階経本が当たつた。手術時の詳細な記録は高橋種紀が「大隈伯病床日誌」として、二九×二〇センチメートル、一五頁、体温表付で毛筆で書かれ、術直後から第一五週に至るまでの記録を残している。他大隈の遭難に関しての治療他詳細な手紙が残されている。

治療に際して、外科的療法は橋本、高木、佐藤の三氏があたり、佐藤進の執刀によつて手術が行われた。麻酔はドクトルベルツが当たり、「午后七時五十分『コロロホルム』ノ吸入ヲ施シ麻酔ノ応スルニ(略)大腿下三分一ノ處ニ於テ皮膚ヲ輪状ニ切開シテ之ヲ上方ニ反翔シ次テ筋肉ヲ切断シ骨膜ニ達シ亦之ヲ上方ニ反翔シ之ヨリ骨膜ヲ剝離シ骨質ヲ鋸断セリ(略)股動脈深股動脈及ヒ二三ノ太キ静脈管ヲ結紮シ皮膚ト筋層ヲ共ニ縫合シ内外両端ニ排泄口ヲ備ヒ疝度『ホルム、ガーゼ』ヲ貼シ固定縋帯ヲ施シテ直ニ病褥ニ就カシメ(略)」と記されている。日誌には最初に駆けつけた医師高木兼寛が直ちに救急処置を施したために出血を免れたことは幸いであつたと記され、高木は直ちに東京慈恵医院看護婦教育所生徒四名を派遣して看病にあたらせた。看護婦が記した体温表、尿量、食事献立並びに摂取量、睡眠時間表などが残されている。

第一回の包帯交換は一週目に行い、二台の蒸気スプレーを装置し、百倍石炭酸水の蒸気で室内の塵埃を沈底して、包帯